雨の島ヶ城

白秋民謡

4

ARS

白秋民謠の言葉

燕の二つ三つと、
鰯のひとつかみと、
たつたそれだけで代へてもらひたいのだ、
わたしのこの民謠と。
そして、歌つてもらひたいのだ、

城ヶ崎の面

近海調

北原白秋著

白秋民謠

小序

三崎城ヶ島は鵜の住む島である。月夜の海女の、燈明の緑の、雨の、簑と笠との投網舟の、通り矢の弦月の、夏はとりわけ天の川の白い夜空の島磯である。それに向つた三崎の丘には薄紫の馬鈴薯の花、粟に陸稲、畑の祭は諸磯あたり、油壺には白い臨海實驗所、壞れた風車の朝燒夕燒など　まことに涼しい風情である。

通り矢の雨

目次

城ヶ島の雨……三
島の燈明　二章……五
城ヶ島　四章……七
磯の燕　二章……一〇
海女　二章……一三
月夜の海女　四章……一四
かはい男と　二章……一七
海の雀は　二章……一九
城ヶ島の娘……二一
夏が來たかと　六章……二五
白南風黑南風……二一
あの子とろり子　七章……二三
おまへ綱舟　八章……二八
帆かげ　五章……四四
沿海雜曲　四章……四八
紅提燈……五一
畑の祭……五九
百姓唄……六九
草の葉つぱ……七一
この子とあの子……七三

城ケ島の雨

雨はふるふる城ケ島の磯に、
利休鼠の雨がふる。
雨は眞珠か、夜明の霧か、
それともわたしの忍び泣き。
舟はゆくゆく通り矢のはなを
濡れて帆あげたぬしの舟。

ええ、舟は櫓でやる、櫓は唄でやる、
唄は船頭さんの心意氣。
雨はふるふる、日はうす曇る。
舟はゆくゆく、帆がかすむ。

島の燈明

1

島の燈明臺に
燈のつく頃は、
なぜか、舟臍が
櫓に添はぬ。

2

沖で赤くて、
漕いで來りや青よ。
なぜに燈明よ。
すぐ變る。

城ケ島

1

三崎城ケ島は
鵜の寢る島よ。
岩に岩藤、
汐しぶき。

2

三崎城ケ島で
見せたいものは、
岩の鵜の鳥、
海女が紅。

3

三崎城ケ島は、

婿とり島よ、
鮑や取らいで
子安貝。

4

三崎城ケ島の
水垂の岩に
赤い鬼百合
いつ濡れた。

磯の燕

1

磯の燕の
飛ぶ影よりも
海女が目移り、
目は早い。

2

磯の燕の
頰の紅よりも、
宵は口紅。
海女が紅。

海女

1

伊豆の岬見りや、
もう日は紅い。
籠の鮑は
まだ満たぬ。

2

島の鬼百合
早や花盛り
わたしや、紅さす
ひまも無い。

月夜の海女

1

しぼれ、裳の裾、
日は早や紅い。
海女よ、月夜の
海となる。

2

うしろ、満月、
飛ぶ鳥一羽、
こちら向きやれよ、
海女が紅。

3

籠の鮑を

濡手で提げて、
海女は濡髪、
月の磯。

4

圓い月夜に
また汐ぐもり、
かげりや、遠かろ、
海女が家。

かはい男と

1

かはい男と
磯馴松は
日にち見てれど、
見飽きやせぬ。

2

うはき男と
沖の瀬の岩は
日にち見てれど、
氣がもめる。

海の雀は

1

海の雀は風吹きや翔ける。
わたしや、ふられて波もぐる。
海の雀は連れ連れ翔ける。
わたしや、片戀、鮑取る。

2

海の雀は波間にうかぶ。
わたしや、照る日も波もぐる。

海の雀は連れ連れうかぶ。
わたしや、離れてかぢめ取る。

城ケ島の娘

むすめ、むすめ、城ケ島の娘、
おまへは裸で海のそこ、
朝も早うから海のそこ、
素足ちらちら、眞逆様に
波を潜れば、青波ばかり。

むすめ、むすめ、城ケ島の娘、
鮑取ろとて海のそこ、
潜水眼鏡で波のそこ、
あちらこちらといのちをちぢめ、
泳ぎ廻れど青波ばかり。

むすめ、むすめ、城ケ島の娘、
海はしんしん、おへそはひえる。

息がつまれど波のそこ、
岩にべつたりしがみつく、
しがみついても青波ばかり。

むすめ、むすめ、城ケ島の娘、
さぞや痛かろ、虎魚の針に、
足を刺されて、揺りあげられて、
浮いて上れど青波ばかり、

前もうしろも青波ばかり。

むすめ、むすめ、城ケ島の娘、
おまへは裸で海のそこ、
波にや揉まれる、生活はたたず、
鮑取ろとて潜つて見たが、
鮑取らいで子ができた。

夏が來たかと

1

夏が來たかと、
海の底見れば、
　　ギツチョンチョン、〳〵。
ところてんぐさ、
花盛り、よ。

オヤマカ、ドツコイ〳〵〳〵、ヨウイトナ、
ギツチヨンチヨン、〳〵。

2

あまりつらさに
眼鏡でのぞきや、
ギツチヨンチヨン、〳〵。
章魚が歩るいて、
章魚の影。
オヤマカ、ドツコイ〳〵〳〵、ヨウイトナ、

ギツチヨンチヨン、〳〵。

3

誰かゐるかと、
磯へ出て見れば、
ギツチヨンチヨン、〳〵。
空らの蛸壺、
百合の花。
オヤマカ、ドツコイ〳〵〳〵、ヨウイトナ、
ギツチヨンチヨン、〳〵。

4

あまり暑いで、
海へ出て泳ぎや、
ギツチヨンチヨン、〳〵。
何か、足引く、
出臍突く。
オヤマカ、ドツコイ〳〵〳〵、ヨウイトナ、
ギツチヨンチヨン、〳〵。

5

誰か來るかと、
濱へ出て寢れば、
ギツチヨンチヨン、〳〵。
赤い宿かり、
蝦の足。
オヤマカ、ドツコイ〳〵〳〵、ヨオイトナ、
ギツチヨンチヨン、〳〵。

首をくくろと、
磯山ゆけば、
　ギッチョンチョン、〳〵。
岩に舟蟲、
さがり藤。
　オヤマカ、ドッコイ〳〵、ヨウイトナ、
　ギッチョンチョン、〳〵。

白南風黒南風

油壺のうた

小燒、夕燒、
風ぐるま。
　明日は日和か、風ぐるま。
　せめてたよりを待ちましよか。
　風が吹きます、白南風が。

小焼、朝焼、
風ぐるま。
明日はあらしか、風ぐるま。
どうで、たよりも片だより。
風が吹きます、黒南風が。

あの子ころり子

1

あの子、ころり子
油壺うまれ、
しんととろりと
見て惚れる。

2

あの子、とろり子
油屋のむすこ、
油壺から
出たむすこ。

3

あの子、とろり子

油壺そだち、
油のりたて、
まだ、とろり。

4

あの子、とろり子
とろとろ燈。
ぼやり雪洞、
晝行燈。

5

あの子、とろり子
惚れごろ、見ごろ、
油菜たねの
花ざかり。

6

あの子、とろり子

とろとろ、寝ごろ、
いつか、誰かさんと
寝て、とろり。

7

あの子、とろり子
おぼろの月か、
いつか、とろりと
出て曇る。

おまへ網舟

1

おまへ、網船、
小雨に苫よ、
日和、てんぐさ、
かぢめ舟。

2

おまへ、餌舟、
餌賣るばかり、
いつも日和見、
降りや逃げる。

3

おまへ、遊びか、

ひやかし舟か、
酒に浮かれて
漕ぐばかり。

4

おまへ、千石
わしや團平よ、
どうせ、下積み
煉瓦舟。

5

おまへ、炭舟、
ちやんころ舟よ。
赤いお襁褓を
また干しやる。

6

おまへ、渡海舟か、

帆に帆を下げて、
知らぬふりかよ、
目の前を。

7

おまへ、帆かけか
また出戻りか、
風の變りに
西ひがし。

8

おまへ、三盛丸、
靈岸島がよひ、
いつも夜出て
晝歸る。

帆かげ

1

ふられやせなんだか、
下田の夜船、
明けて濡れたか、
帆が重い。

2

沖の段々帆は
いつ出てわせた。
何處の霧れから
出てわせた。

3

霧れて逢はうぞと

別れたものを、
すぐに時化船、
最寄り船。

4

雨にむしろ帆、
日和に白帆、
朝日夕日に
緋の片帆。

5

月の夜ふけの
幽霊船は
空に帆ばかり、
風ばかり。

沿海雜曲

1

北條がよひか、
遊ケ崎か、
見ても通り矢、
安房ケ崎。

2

雨は諸磯、
二町谷は月夜、
燈、チラチラ、
油壺

3

茶屋は引橋、

藤の花盛り、
娘ざかりは
來て三崎。

4

たとへ松輪でも
長井はよしな、
浮名衣笠、
見て通り矢。

紅提燈

孟蘭盆の宵、三崎と向ケ崎の子供たちは、北條入江を隔てて、互に紅い提燈を振り振り歌ひ囃す。互に歌で罵り合つて夜のふけるのも知らない。その紅提燈の唄として作つた。

歌ひ囃そよ、
紅提燈の唄を、ヨ。
濱の盂蘭盆はけふ明日かぎりよ。
むかうの提燈まだ遲い。

こつちの提燈はや紅い、

歌ひ囃そよ、
紅提燈が揃ろた、ヨ。
揃ろた、揃ろたよ、紅提燈が揃ろたよ。
むかうの提燈まだ點かぬ。
こつちの提燈はや點けた。

歌ひ囃そよ、
向ケ崎の章魚は、ヨ。

足が七つで、九月で生れた。
むかうの提燈そりや逃げた。
こつちの提燈またふえた。

歌ひ囃そよ、
三崎の貝は、ヨ。
赤いべろべろ、舌出して乳なめた。
むかうの提燈そりや消えた。
こつちの提燈また點けた。

歌ひ囃そよ、
汝つちのお母は、ヨ。
見ても痩きす、揚潮河豚だんべい。
むかうの提燈ふつ消せやい。
こつちの提燈振り立てやい。

歌ひ囃そよ、
汝つちの父は、ヨ。
いつも法螺貝、赤耻かきだんべ。
むかうの提燈また落ちた。

こつちの提燈また殖えた。

歌ひ囃そよ、
汝つちの姉やは、ヨ。
鶩尻ふり、ろくろ首の女龜だよ。
むかうの提燈それ化けた。
こつちの提燈それ攻めた。

歌ひ囃そよ、
汝つちの兄やは、ヨ。

蟹の横這ひ、なまくら海鼠よ。
むかうの提燈それ這つた。
こつちの提燈それ追つた。

歌ひ囃そよ、
汝つちの背戸は、ヨ。
雑魚の御施餓鬼、蒼蠅のお経よ。
むかうの提燈葬式だ。
こつちの提燈お祭だ。

歌ひ囃そよ、
汝つちの家は、ヨ。
磯の宿かり、日乾しの螺だ。
むかうの提燈かりものだ。
こつちの提燈わがものだ。

歌ひ囃そよ、
紅提燈の唄を、ヨ。
濱の盂蘭盆、けふ明日かぎりよ。
むかうの提燈もう暗らい。

こつちの提燈まだ更けぬ。

歌ひ囃そよ、
紅提燈がふけた。
ふけた、ふけたよ、紅提燈がふけたよ。
むかうの提燈はや消える。
こつちの提燈まだ紅い。

畑の祭

大正二年九月某日、相州三崎は諸磯神明宮祭禮當日の事、上層に人形、下段にお囃子の一座を乗せた一臺の山車は漁師と百姓とを兼ねた素朴な村人の手に曳かれてゆく。先づその山車は鎌倉街道から横にそれて、一小岬の突鼻の神明宮まで、黍畑や粟畑の高い丘道をうねつてゆく。而も日中、日は天心にかかつてゐる。徑は緩い傾斜を登つたり下りたりしてゆく。崖の高みを行くのでその兩方に眞碧な海が見ゐる。徑が山車の幅より狹い位

なので、松や密柑にぶつかつたり何かする。而して畑の上でも何でも構はず曳いてゆく。ぶつつかる時は人形の背後に居る奴が高い處からぽきぽきと松の枝でも茂槿でも手當り次第にへし折つたり、押し曲げたりする。馬鈴薯は馬鹿囃子に浮かれて大喜びだが、立樹は可哀想だ。山車が進んでゆくと、そこから神明宮と相對した油壺の入江が見に、向ふの丘の上に破れかかつた和蘭陀風の風車が見にてくる。その下に大學の臨海實驗所の白い雅致のある洋館がある。芝生が見に、キミガヨランが見に、短艇が二三艇浮いて見にる。まるで南伊太利あたりの風景にでも接するやうである。愈々丘の畑をすべり下りると平たい、かつと明るい渚に出る。右も左も渚である。ここに神明宮の鳥居がある。それから圓い穩かな丘の登り道になつて、その向ふが愈々海になつてゐる。社前の渚には漁船が幾艘も引揚げてある。その間であかい西瓜店や何かが出る。ここで山車を休まして、一同は赤々と日が暮れるまで盛んに酔つぱらつて踊つたり唄つたりする。中には白痴もゐるし、瓢輕者もゐる。萬祝衣きた大禿頭もゐる。而してここの神主は平素は三崎遊廓の檢黴のお醫者である。凡てが如何にも馬鈴薯式なので村の祭とか田舍祭とか云つたりするより却て「畑の祭」とした方が適當かも知れない。この俗謠調はその山車のお囃子として作つて見たのである。

やれやあ、さの、せえい、せえええい。
三浦三崎は女の夜業、男後生樂寢てまちる、
よういい、よういい、よやさのせえい。
ええ、そりや、なあ、秋が來たぞよ、三崎諸磯の
段々畑から百舌が出たで、
ええええ、や、ほろほにや、や、ほろほ、くゐくゐ
ろうにや、くゐろうにや。
やあれ、日はよし、地はよし、海や凪ぐし、今年や
豐年歳、穗に穗が咲いた、
やあれ、テケテケ、チヤンチキ、チヤンチキナ、

ありやりや、こりやりや、これわいさのせえい。
五郎作よ。太郎兵衛よ、杢十よ、ちよいと來なせ、
丘や畑は萬作じや、おや、俺ちの陸穗もやつと熟
れた。
やれ、南瓜も飛び出せ、午蒡も踊り出せ、枝豆、隱
元、ささぎ豆、
なた豆、落花生に胡麻の種、
莢がはぢけた、赤ちやけた、
化猫、雉猫、かま鼬、栗が尻尾を黄に垂れた。
稗は眞黑、眞黑、くろんぼ、王蜀黍や赤髯、赤髭毛

唐人が股くら毛。
蜻蛉がからんだ、蠡蟬がセ、栗鼠か駈け出す、鳶が
セ、
お薯もころげ出せ、馬鈴薯、里芋、つくね芋。
子を生め、子を生め、山の芋、
こちのお嬶もどんと殖せ、
俺ちも壯健で、うんと肥せ、
種蒔け、種蒔け、蒔かずにやゐられぬ、蒔かねは憂
さやの
子種はどつさり、畑は上上で、畝高で、水もよくき

く、肥料もよくきく、種蒔け、種蒔け、種蒔け、
づんと殖せ、
そこら一面鋤いて返せ。
子をうめ、子をうめ、土の芋。
やそ、その子は誰が子だ、俺が子だ、
汝ちの畑にできた子だ、
それでも誰が子か知んねえだ。
麥だか粟だか、芋だか、稗だか、子種はどつさり、
畑はひとつよ、
誰が子でもよかんべ、出來た子は俺が子。

やあれ、なあ、三崎やよいとこ、女の夜業、
ええ、凪にやええ、凪にや鰹釣り、夜中は寝まる、
たまに風吹きや畑うち、
うんとこしよ、どつこいしよ、
惚れたその時や命もいらぬ、
いやで別れりや離れよとままよ、
翌の晩にはまたできる。
おおさ、やれ、やれ、三崎よいとこ、男の後生樂、
子を生め、子を生め、土の芋。
やあれ、曳け、笛吹け、鉦うてよ、

太鼓どんどと打つて囃せ、
子供は眞つ先、地主どんの音頭で、花笠そろへた、
團扇をそろへた、よいと曳けよ、
お婆も來、お嬶も後押せ、
畑の眞中、お囃子や、チヤンチキ、チヤンチキ、
浮かれて、はしやいで食べ醉うて、
而も生眞面目で泣いて通ろ。
やあれ、曳け、山車よ曳け、海が見ゆる、
沖はええ、沖はてるてる、風車は廻る、
磯の神明樣の片時雨、ようい、ようい、よういと

なあ、

ええ、そりや、退した、
お巡査さんが逃げ出す、
神主さんも笑ひ出す、
支える、支える、松の木に、
木槿も邪魔だよ、切ろやれ、捨よやれ、やあ、
蜻蛉がからんだ、蟲蟬がセ、粟鼠が駈けだす、蔦
がセ、
お薯もころげ出せ、馬鈴薯、里芋、つくね芋、
子を生め、子を生め、山の芋、

南瓜も飛び出せ、芋蕷も踊り出せ、この冥加えな、
あれわいせの、これわいせの、この冥加。
さあさ、浮いた、浮いた。

百姓唄

逢ひたがんべ、見たかんべ、添つたらよかんべ、
家に知れたらやかましかんべ、
世間がわるかんべ。
おさ、やれ、やれ。
何だつべこべ、惚れたがどうしただ、

家で知つたちゆて添はずにをかねえだ、
世間か何だんべ。
おさ、やれ、やれ。

草の葉つぱ

草の葉つぱは風吹きや戰ぐ
地からしんしん搖り動く。
一切合切投げいだせ、
私ももとより泣き上戸。

草の葉つぱは雨降りや生きる。

地までさんざと濡れしとる。
一切合切づぶ濡れだ。
私ももとより一途もの。

草の葉つぱは日が照りや躍る、
地から底から泌み光る。
一切合切照りかへせ、
私ももとより命がけ。

この子あの子

あの子もたうとう死んだそな。
嫁取り前じやに、なんだんべ。
　蕪畑にや鰯がはねる。
　お墓まゐりでもしてやろか。
この子もたうとうおつ死んだ。

嫁入り前だに、なんだんべ。
　花は馬鈴薯、うす紫よ、
　鉦でも叩いて行きましよか
どの子もどの子も、なんだんべ。
色事ひとつ知んねえでな。
　子芋もどつさり殖えたによ、
　かはいさうだよ、まつたく、なあよ。

城ケ島の雨

定價參拾錢

版權所有

大正十一年十一月十五日印刷
大正十一年十一月十八日發行

著作者　北原白秋

發行者　北原鐵雄
東京市京橋區銀座尾張町新地五號

印刷者　山本源太郎
東京市小石川區久堅町四十五番地

製本　金子

發行所　東京市京橋區銀座尾張町　合資會社アルス
電話銀座二一九三番
振替東京二四八八八番

白秋民謠

第一輯　空に眞赤な
第二輯　さすらひの唄
第三輯　朝草刈り
第四輯　城ケ島の雨
第五輯　朝立つ虹
第六輯　朱欒の港

◇定價各册參拾錢◇
◇送料各册貳錢◇

白秋パンフレット

第一輯　短唱　月光微韻
第二輯　短章　落葉松
第三輯　短章　初冬の星
第四輯　詩集　動き來るもの
第五輯　民謠體短唱　薄陽の旅
第六輯　小唄　雀の頭巾

◇定價各册參拾錢◇
◇送料各册貳錢◇

白秋童謠

第一輯　螢と苺　小杉未醒氏畫
第二輯　夢の小函　前川千帆氏畫
第三輯　こんこん小山　小杉未醒氏畫
第四輯　お祭のころ　木村荘八氏畫
第五輯　お月夜のうた　森田恒友氏畫
第六輯　ねんねのお鳩　木村荘八氏畫

北原白秋氏著　菊版　定價各册參拾五錢
二度刷美本　送料各册二錢

繪入童謠
祭の笛

北原白秋氏著及裝

前川千帆氏畫　四六判絹裝極美本

本集は、白秋氏最近の童謠九十篇を收むるものにて、本集につき特記すべきは、氏が藝術自由教育の見地より、子供が樂しんで歌ひながらに、自づからその智慧をこまかく、輝やかに、その智識を深く廣く導くために作られた新風の童謠二十二篇を加へられたことである。白秋氏の美くしい新作童謠を知り併せて教育的に一生面を拓いた新童謠を知らんとする人々に特にお薦めする。

定價貳圓八拾錢　送料拾七錢

アルスの童謡集

北原白秋著　**とんぼの眼玉**　定價壹圓九拾錢　書留送料拾五錢

北原白秋著　**兎の電報**　定價壹圓九拾錢　書留送料拾五錢

北原白秋譯　**まざあぐうす**　定價貳圓八拾錢　書留送料拾七錢

三木露風著　**眞珠島**　定價貳圓八拾錢　書留送料拾七錢

徳永壽美子著　童話　**薇薔の踊子**　定價壹圓八拾錢　書留送料拾參錢